



非
錯
世
說
一

非
錯
世
說

全
五
冊
合
本
一
卷





今冬其ういほと秋のぼり所きりん
 加の金城を去りし四里はうりにて表老
 年中よ飛もき湯涌といふ温泉と名を
 うね山深うと樹もけり郭とてな富
 る所なりと云ふもあつたといふは
 おもむく北枝叟乃書はて秋のむら
 希田先師ふりてとて考集して正風
 人物誌と題号しけり門人種れ世を
 せんすけり書集とて秋の御り此名はさり秋

このありやうら終極なるに仲叔令叔彦重の
 事件がそのおもしろいおもしろいもの多し
 けいとい佛塔世説と号し多額と持ぶらるる
 とくんと多しおもしろくありりしとて利を
 せらるるおもしろくせらるる海東山志
 場をよおわく天明己卯春もさう
 おもしろい閑更とていふまじ

誹諧世説卷之一

目録

- 芭蕉翁風雅の志を示説
- 蕉翁盗人の教化の説
- 蕉翁義仲守難奥寢の説
- 万子翁箴別の説
- 能順蕉翁の令終を笑ふ説
- 門人蕉翁の辞世を引く説
- 蕉翁賀品金昌守一宿の説

蕉翁内藤君俳諧の説

万子蕉翁と初て對面の説

俳諧世説卷之一

芭蕉翁風雅の志を説

芭蕉翁やせう之の緑衫ろくしん御ごの袴はかまをはきしては金かね城しろふを杖つえ
と休やす免まあつつし時とき小春こはる亭てい々々一いつ夜よ會あ合ひわりしてその
席せきの答こた意い山さん海かいの称なづ物ぶつをははしるは縁えん者しや矣いをはらしるは
たらしるまりまり其その終おひふほ會ごの事ことを物々ぶつ々ぶつふ
翁おきな曰いふはいのもてるはづらいの程ほどをしらずくもあ
らずといふは恨うらみを大おほ名なの浮う城しろ乃すなはしてさ
み風かぜ雅みやびのさびしるはとりんを我われらと浮う草くされはるはるはるは

めぬたぐひあつてあゝハ州深き野道ふ登森の道
 と結びあゝハ茂アゝゝ本の下ふ一むしれぬとちのぐ乃
 外ほせふ夢にらゝゝ一吹やうほ珍物厚味豈世と
 ころゝものおきゝゝんやりゝゝゝのてゝゝと文を
 結ぐんとあゝゝの食事此れをゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 て只風雅のこびをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 其はらほ乃川下ゝゝ一亭居ゝゝ會席あゝゝゝゝ
 の誠ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 へに翁曰序もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 冷飯のゝゝ鉢をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 とやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 そりゝゝゝのゝゆれを謝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 諸礼修止ハ風雅乃奮制ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 皆くゝゝゝ圓居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 んのつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 とおゝゝゝゝゝ風雅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

浴舎の奢小潔を費して能借の味とりては拵里戲
 場乃物好して凡雅の序ふ下まると云べしとほ
 尸子終らる金城の人く此詞を感ドそれうしてハ
 世のづらゝ者そ戒免凡雅小粉骨を致と事ハ成
 て後よもつても小枝雙善柳舎のごん法園ふ名
 言く呼もてて人の如来一事もつてかゝる教戒
 とせふらく守りぬら故ふと是もくふ空明の訓誨
 乃ほ免やうきゝらうて金城の人々物をばしむ
 とくく一々これせゆてもくうつてく終をくとも

の基はきりり

白ありりさし一其味をあらか芭蕉

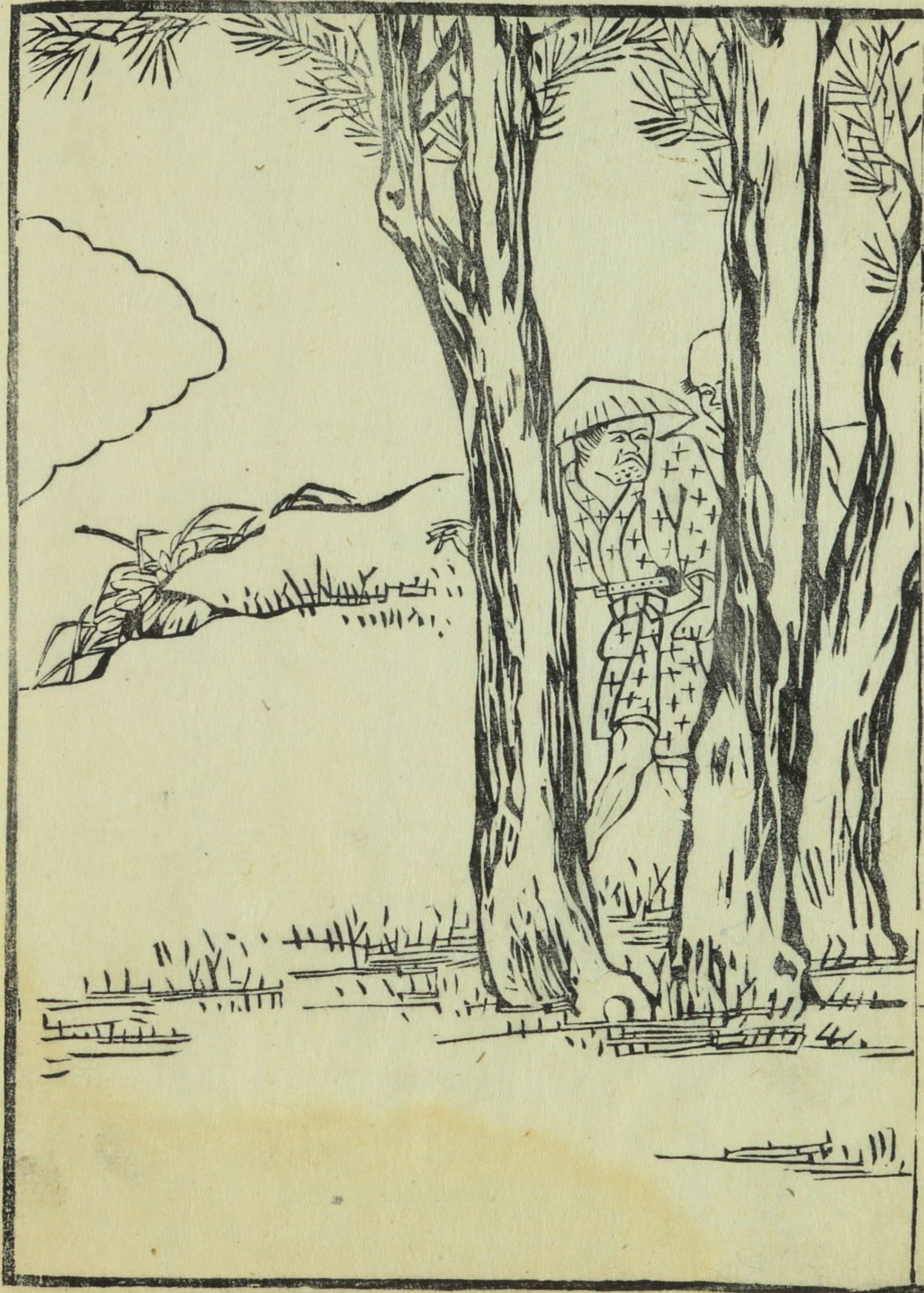
蕉翁盗人の教化の説

ちや成公解めくもとくく切柳よ出まひ近州日
 聖山のやうらと通うぬまふぬまふづり日ちや
 ちく屋ぞうおじまき家居もなう積ばそこけりて
 くだらう切給ふよなましく市よりぬる商人の一人
 ちうちつちつとをんけり一やうのゆるめ可
 あよと終らう一里程切てあらくといふ里あう是

一板とわうし路と鯉みぬ一子もぬて焼く
 くて草鞋の結も見ぬ竹の細杖とたのふれ下
 足づともみあふ内は互糸もや糸林ふ没して小糸
 のふもたどら海にた経ふて悪うられてけりるえ
 わるふかこの本糸より出来る者わりの糸を
 とおし申りあふを治女人目もふ屋を海を笑を
 あり長さ物腰ふとて入たれおのこ人さあられ
 出たり是こそまま一旅人の物を掠てその一枚
 と送る白波とよそのよら糸と夜もつる足をもやれ

けこ路を彼男等夢をわきまやうい坊家
 が所うは名のとほとも知り給んて其負ひも
 その若るものそのら控く給んやとても僻
 事して女をよめる家く油門ありとて助くを招
 むと暫い狸ふのちうはやがた右ふまはみ
 てそつとて付凡情疑のかく眼のうらまえておそ
 ろしに色せりのさう箱らすくも解るさあむとそか
 せを控糸のう糸とてめね料撒の境界あり時ハ珍の飯
 小飯をぬくらうとてさうたの蔬一枚の口の寝を楽し

林書



りくうり身ふすゝひー物をばー先杖子靴つゝ
 う乃のすで皆人の旅とに申せて是と利の
 今日乃をゆとらそ樂た浮世とすづくのわと川乃
 のそののたくなたる坊まふり〜ん況や金銀の事
 やう旅その懐ふかきんとも修好者とのぬとの
 持る旅人と思つゝこそ之にぐも衆相され〜種と
 汝もつゝいゝまなまゆされ〜んぞをえん伊と〜と
 て先有る風呂敷包を投出〜ぬふとのをせ者ども
 ちゝうて引ほどき〜んふ茶碗の反故の外塵一付

えいぞ紙中をかきらぐー風呂敷を折振いんれ
 ども是ぞいぢみぢみそのへ何〜んもるー旅人ともも
 めこれ茶〜ねくたふもかた貧僧うふと妻よお達の
 教〜ん〜まふ目と目を見合せて居〜り霜守ひて
 のま〜ん〜おが身の上の調度行〜もほ〜き物わ〜ん
 のぞ〜ん〜もすづ〜ん〜も〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 塩〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 うる〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 走〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ちの入りきりやまふさやまのめしてかたは衣と靴
つさささつとさつとつとあかきえととや用さ
ととめと流とあまんとととと靴をとめて因果
歴然を常速速のりまど靴とつらふれ一は手
監人たつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あまんとととととととととととととととととと
た格のふらととととととととととととととととと
あまんとととととととととととととととととと
あまんとととととととととととととととととと
あまんとととととととととととととととととと

一休禪師乃山がもらふ途終ふと記
さらのさふうてととととととととととととととととと
来ぬぞととととととととととととととととと
けととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
教導ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ね翁ととととととととととととととととと
方ふぬととととととととととととととととと

笑ふもほふも一肌落しけりるを感ずて
 利もくも此時の事なりとて
 芭蕉

蕉翁義仲守雅貞寢の説

くや成翁守雅を湖南の義仲守りて雅貞寢
 けり其はく先く四月朔日ありて外西
 紙張をうりありく泰西翁守成ふ討てり
 あり賣賣と笑くしが教ひをせのりここの
 つまらぬといふとあれはらむと教ふく小甚翁の法

あつて郭公も鳴るんやとて教の姿を笑つて時をんや
 そ後をんよんんそてかたの賣めりきたるそ
 けんく是成おむき債を控へるもの月也し詞
 度ふけりて實小朝と書四の録はものしてはる
 あり静小賣出くもるもの同くかぶくはる乃
 俗とせんうとの法ひを教とぞ是等ハ風雅小
 一の誠辞といふぞくよんも思ふ金言をん
 うし今の世ハ風人そ志をこししてそのを求
 むもは人の上をけりんそんをくは果

伝が書て返敵の心を生むるのうらう何そよの紙牒
賣ふ所ごうや

万子翁餞別の説

ちや銭翁小園行脚の時金城の万子遅くして
万子の對面小橋をくくると致き結いて翁のあそ
と志すといく裸子小坊宗遊うけられし小松何そ
返付くく相對面ありて馬のくふむけとて白衣一
金二ふとちちふ翁の曰家ハ一筆一瓢を樂し
て臨庵と名くするの身なり堂縮布乃名取子

若しまんやばして金非ハ大盜を惹の標ハ七捨人の身
小のちて詮しとそ受給りて万子もさぬぐみ強ひ給ふも強ふ
ゆるし給りてさふおひく翁の風儀をいよく感づはれとぞ

能順蕉翁の命終を説

芭蕉翁終み十餘歳とせ世をさう流ひしとが如小松の連歌原
能順吹て云よ死時あり世の強人をいふ年既六十七十ふ
ありぬもバ何とてわが成ふく業トハ事事ルありがし
と見くそ古人ル極老乃作者いよく風流の才とてやうよん
由る終ふ風雅な終ぶその八年又十の去後をうらうといふべし終乃



於ほろりし終一車此程の如く
 としつ終る誠一途の信の者
 の志を斗笠の
 人の同然とてさよふらげんと
 する

蕉翁の辞世と其説

芭蕉翁終馬の初み枕をふりて
 辞世の事とて其の終を完
 出はらざる事ハ皆辞世
 みるやまは今更辞世とて
 誠蕉翁血脈相傳乃教

訓とてなまきとの記

蕉翁賀彌全昌寺一宿の説

芭蕉翁の真乃細道のうら加州大聖寺の全昌寺
とつみちうく

庭掃て出るや寺ふらる柳

け白の跡み故あるがまらそお夜曾良けちり一宿
に故ふ芳名を称してかくハア子種ぬと見え世説徳
行篇に郭林宗ハ方正の士うて逆旅ふやどる事
め種へるもどそ亭を掃除して過りそわい

来りし原旅人けわうこほをそて則夜を郭林宗が
屋ごうなるゆをを知りしつう翁け故に紙とてしら
柳に對して夜お曾良やどるたる跡を感慨あり
しと是を紙白ふらるる白きべし俗中の説
るるらみ中にて翁の言やうらひそ種うらうら
種うらひやどる者わもそ翁のけ白意其外ふ
性ぶの白紙と残りそ者ふらうてとしきこる
るれし紙くそた事ハ知乃の書ふわづらて略
若緑集ふ翁塚とて

かみみちて知らばけりあひのどい 曾良

蕉翁内藤君誹諧の説

くせ代翁ある時内藤露沾君のぬえ(百)終く
俳諧あつたり主君ありくうう烟草を擲ひ流し
故に翁もその序をへたをこそ香流りて其角も
其序よけりぬめりて翁よけりて云々滑稽の流
流をりて中翁と云々あつたり威権も怖るが
位も屈と云々今日内藤君の序序よ
て烟草と香流りたり一編似たりと云々小舟

是を感ひぬと難む翁其意云々といひ疑ひ俳諧哉
何のくせもふと云々あつたりあつたりあつたり
あつたり小技ありと云々用ひたる虎とあつたり
あつたりあつたり風流のうらも宣礼節と云々
法を破るをりて酒落と云々築紬の徒と云々
て風流と云々あつたり頑愚の倍と云々德行の君子
六上座者のうらと云々あつたり今日内藤君の雅
遊了烟草と禁じたる論と云々あつたり禮と云々
いふ一介乃云々あつたり於坊主と云々あつたり
風雅乃

乃ふ遊び塵尾を振る二三子のとよる是をこして
 二三子象小宗通の僧名をとりとけ故小落法君
 の孫をくつうて諺笑とるをゆと蒙る志くくばま
 人け例としてを志嬌ひ結ぶるをこへ其く成
 茂みとるものして趙高が床をりて馬みとるの
 罪を免るるをば左に象の烟草を香ぶるに礼あり
 孔子のこもも志づく徳を行者ら世人論うと云
 との法くう嗚呼古今の習俗なる哉とて歎息し
 めふ其角大に愧く背汗して返ぬる今思ふあり

礼と論と結を安く言邁と象徑と彷彿くう候
 仍者是とくも礼もて氣象の高上なるべく奉
 止へ礼と顧ぐ一糸の細道は脚小湯殿山禪
 定の時乃紙繰加緊今ふゆして掃品増位山乃
 以屏堂のあり是つてうれものもけ小糸へ佛頃禪
 師小嗣法の大居士ありとる徳を何ぞかる細謹ふ
 くるり結ん結るをその時の小物もて控もるに持
 りるも結ふの時小糸とを俗小結んでて其礼節を
 志を結ぶるれむうのめきてもな成のまらるる言附

うして其徳つくりて金高き事と号して

万子蕉翁と初て對面の説

芭蕉翁元禄の江國外御の時万子に下りて
對面ありて万子曰翁を諸國よ門人として
その居の融通の事只るぬれぬ家の方外の方と成
てありて御く御居をち護とてつくり翁も是を
うまき事とせりてらんそこのあやもこと強し
小枝杖乃坊々窘急を救ひあはる諸國の御
のあつと成る金城乃語人を遊り免けたるの

ありて人とあふとぞと終に蓮二法師も万子の
事を稱して我友と思ふありと獅子物ねよき
もう親ゆ推の深切を称あしなればあり又蓮二
房が本朝文鑑も翁の友よ万子素書ありて
とをりせり世の人万子の蕉翁の門人十哲の下り
して通を許六蓮二より傳へたりと号して
その所り大なる得りありてふにせりて翁の友
と稱する古書よ明らかり

岩踏く一月くのりて万子

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of the Japanese text on the opposite page. The text is written in black ink on aged paper and is arranged in approximately 12 horizontal lines. The characters are fluid and connected, characteristic of the 'sōsho' (cursive) style.

俳諧世説卷之二

目録

- 残子蕉翁の書と乞説
- 本草蕉翁の墓と詣り説
- 翁病中看病人よ句と金説
- 其角嵐雪が菊の句歎息乃説
- 或人其角ふ巻の鮫と乞説
- 嵐雪が妻猫と愛とら説
- 惟然枝布を侍る説

談諧世説卷之二

万子蕉翁の書と乞説

芭蕉翁金城逗留の内連中發白紙冊を徳め
 り〜い〜らん万子の事を事如く只南無高来佛
 の五字をごご書て〜いい宋窓本号とあり竹のふ
 や家の翁の友とありんと〜れりる象乃
 りどけ一隅をあや挙てあるべし〜ん〜

万子蕉翁の墓の傍に傳説

大州に芭蕉翁の字ありて其のよの三夜一鉢乃

談諧世説

りうけふ塵の浮世とていふも風流の匠者なる翁
 の生前も悔いて志厚くもやげなくせし人あり故
 ふ翁乃減後ハる哉こゝ子貞が家とふ處もろく如
 き西影をととていふも終るもど有時翁の墓に詣て
 か多後あや塚より外に徑をくり 大州
 かくの致をくして終るもど在ふけほの菴中に深く
 菴に居て誦偈の外に世との交りをもてらておひ
 しりのわるとは甚連中れりきといふもて誦偈
 の席きくとも又二公子も交りていふも

坊に花梅がたりとも嘆をせ終くとりくふ大州著て曰
 そろりあり翁減後ハる世との風流終るといふべし
 二公子も交りても無用の事なりされど誦偈外におく
 世とへ交りては坊のづゝ流けりかされて老の身へ堪へ
 哉そのありあふ誦偈の時と坊のくお交りやあり其
 外ハおを便りとして何の用事とて一生おの交りも絶て
 かりやるともなふ執心のありさそを表しふ大州去末
 翁も頼母したるもよおひ終ひるもかろゆのある由いふて
 翁病中看病人よ句を重説

長考

芭蕉翁新波の病床よりやま寂き終ふ時看病
の人くふ發白杖をこぼして曰今日よりしてこそ
子の白く家う死後の作ありとせよなう故う二字
の相談をかかへ皆く甚らぬを考ふとの終ひ
るを人くあうむをそ終骨をつくしりりら
大州の白よ

うづくほれ茶灌の下はきこ成 大州
け白をりり出まうりと翁の終負ありりる去來是
と笑て誠よく保時を山海の孤奇と求むげとあり

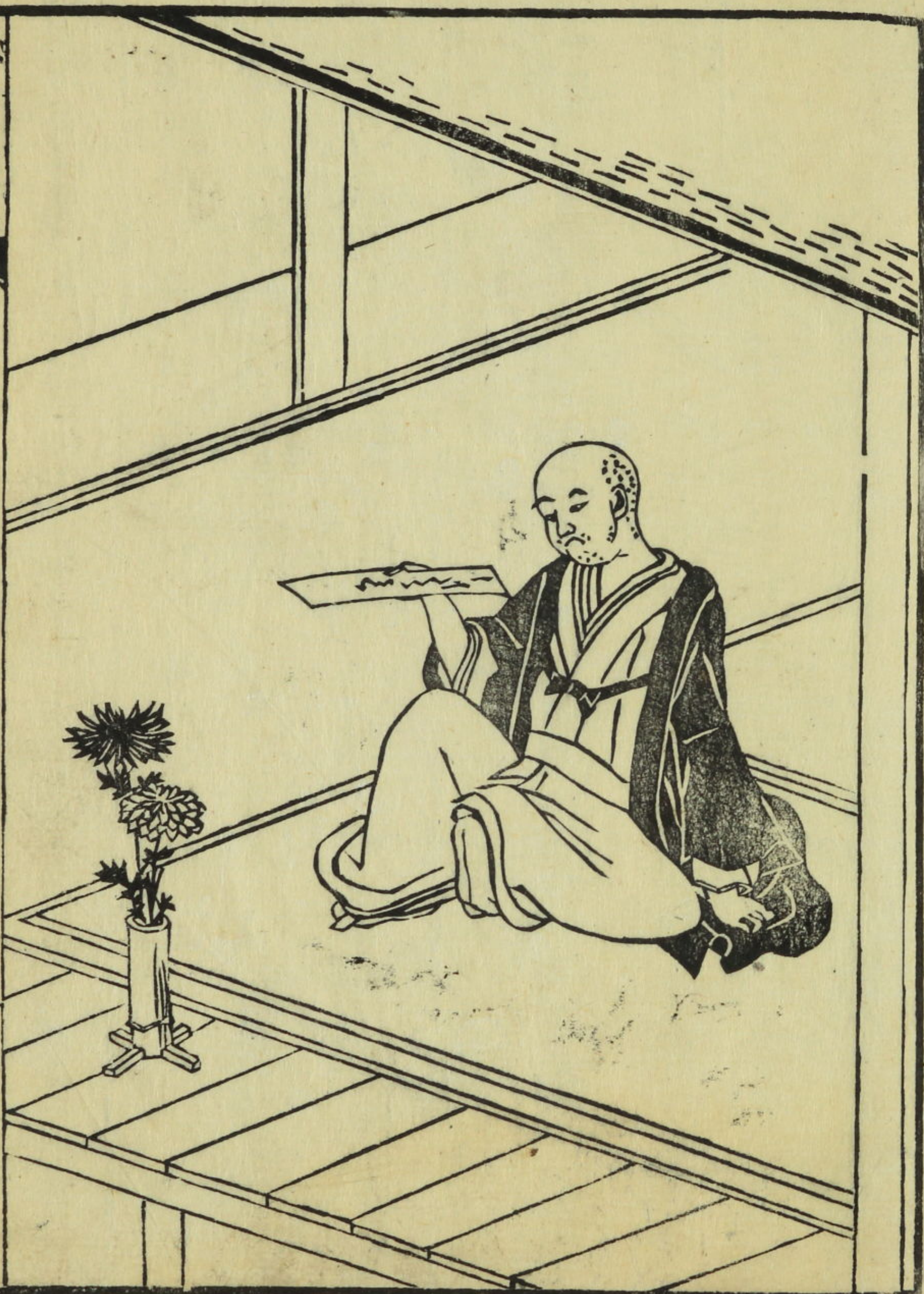
のふく其誠つくがたありとらう風雅の要義成
奈してくもくも大州が作をうらなふ又もあ
り一人も信りらるるを蕉門ふ大州去來智ふ
和らふ人丸赤人あうぐくくつら上を下をいさうた
作者をれどわうやうに偏執をく果ふまう一人を
たる事道は堪能のまう一人のたふはむさぬ
流のふらふいふ能なる又あうた
有明く始り向うたまう那 去來
おしくとつどたをや香乃門 全

其角嵐雪が菊の白歎息の説

嵐雪あり年々重湯よ

貴菊白菊との外乃名あるもや 嵐雪

とあるを志す其角ぬく足を感じて云家一生
け白よ及ぞと世にもくはんと終りて後其角
よ菊の發白を志すそのわけ終る公の
信きくや目ふたてく塵もさす。の白あふ嵐雪
うこの白を書て其角書と志すめてきく家へ白
よ菊の發白を志す一と終り則を志す一社中乃



倚翠亭所持の則卷が画よ其角が符のきく葉は
 白をゆて綴ち了るるそ近き頃の画録了る灰塵と
 ありし惜むるさよ堪へりし人のそくさるる
 粧ん涼うらねあふらそ其時をせりしとちの君を
 とうきりその折くよむきしうんば今うたふも
 新の秋の人多き風流のうら下りたるきり
 きんとうきりも歎けた事にあむとやしして
 せし祝融神の災く古人の書を考ふるそく
 うん金城の塩屋何うかゆらに蕉翁志凌の

旅日記ありて其文の小笈の銘し暮柳舎乃
 筆して

け翁捨屋ふ布と志が終り那

と其まきしと法と終りれども是もよしたの年
 火災よううて今ふ飛さく法にけりし終り香柳
 舎うらぎし厚く是をうらさせて入りし家うん
 怨よおむむきしぞし笈の小文いと品符の大和
 記行のところけし梓りもりりしうら本書も
 し品がとくうらか賀へ傳へ

或人其角カクの巻マキの点ツキをシ説シ

ある人其角が「点取の一巻を」といふを其
其物モノふして「点」といふも「其角その
巻を一巻」といふくといへて「使ひ」といふやうに
事コトの事コトを「知ん」の事コトを「行ば」ぬる「附ツケ」を「際サカイ」と
ふ及び「速中ハヤナカ」に「先マヒ」に「点ツキ」を「乞ヒト」ぐ」といふ使シを
是コト非ズ「少く」といふ事コトと「少く」は「点料ツキリヤウ」も「少く」といふ
やといひ「少く」は「其角」といふ点料ツキリヤウを「乞ヒト」ぐ「乞ヒト」ぐは「先マヒ」
に「乞ヒト」ぐといふて「乞ヒト」ぐは「少く」といふ事コトと「少く」は「点料ツキリヤウ」も「少く」といふ

生ナマ風カゼ流リウる事コトを人ヒト皆みな知しつゝ「ゆゑに」
とも「流リウ」る事コトを人ヒト皆みな知しつゝ「ゆゑに」
雅ヤふれる事コトを其角カク何なにを「小コ」
今イマの宗ソウ通ツウ教キョウとる者ものの内うちを「徒タ」も「其志シ」も
「や」といふて「みづらひに」古コ人の「洒落シヤラク」と「撒サ」
そのものあり「甲乙ケウエツ」の「風雅フウヤ」を「賣物ウリモノ」として「短冊タンパツ」
「價ツケ」を「定ツキ」む「点料ツキリヤウ」は「甲乙ケウエツ」を「定ツキ」む「短冊タンパツ」
其角カクが「其志シ」ありて「其徳トク」あり「故ゆゑ」に「貪ヒレ」も又
風流フウリウの「二ニ」子コ「戒イハレ」先マヒは「み」て「欲ヒトシ」を「治ツラシ」

の凡雅人と成る一穴賢塵俗よおらりたる能諧
賣とちう事あつたつて負徳老人の連中老
人此高点とくあれた事をかたらん老人

三弦の糸より細き能諧と点とらつてを考れた
として種々のを連中のぬつと

三弦の糸より細き能諧と点とらん事を考れた
と云ふして知い事を考らるる口はきつきた
とこのことい出でてはこれ貪つておのふ人あつて
天よりおのふとらつて平生のきこられ

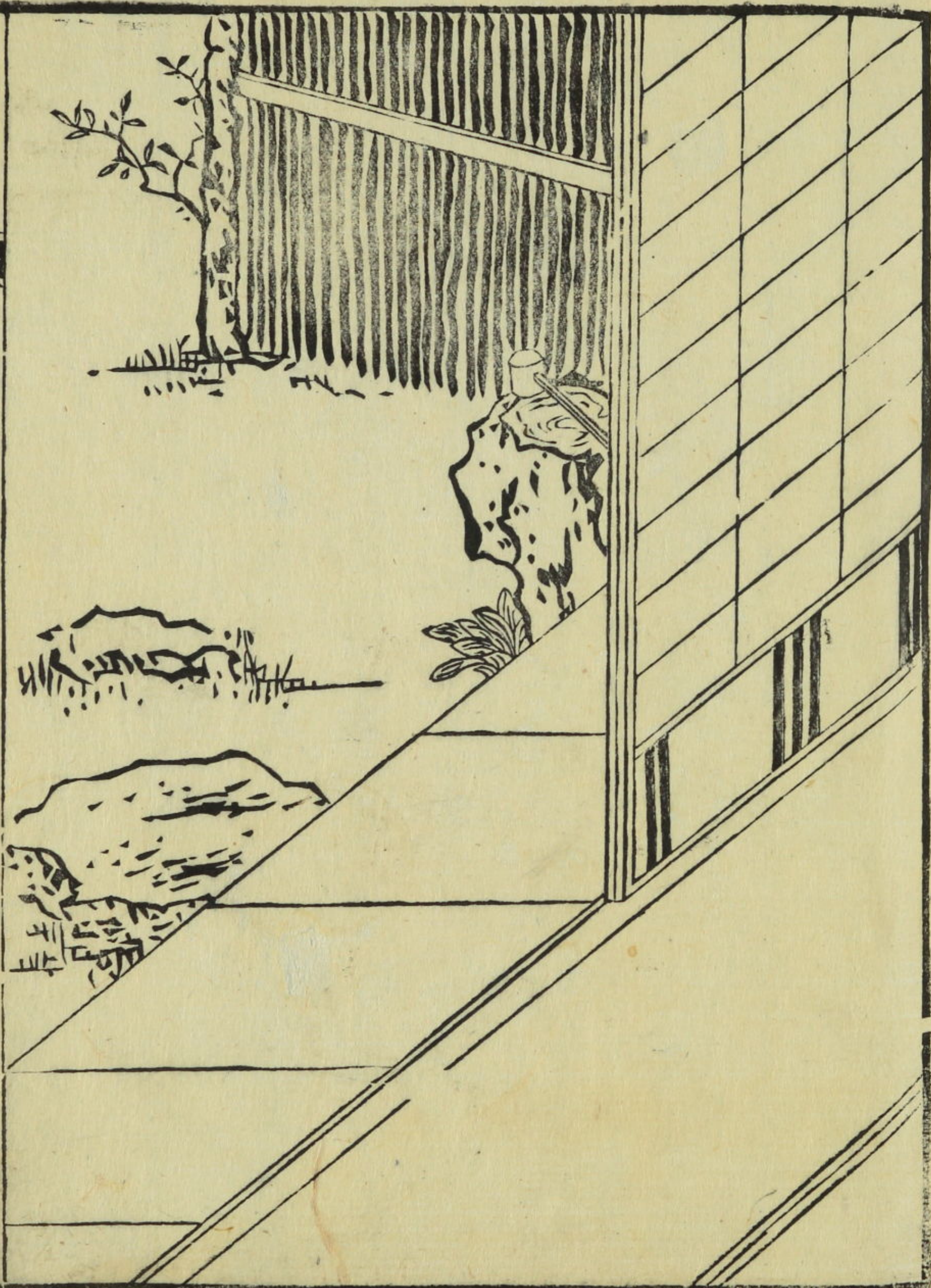
さうしてさう能諧をりて口を執らるその点料
と受る事ら則儒師の東脩佛家の布段と同一く
是れくてちうぞ口版をぬらんやあつて強者業
門をらるる外の業なく能諧のことりて今日の業
とらるその料を定えて点をとおとも又凡流家り
一律さうして種と其人さう其ふとさう料の貴
賤をわらつて式々白を賣筆を高ふの事他門
の凡流者もつてさうて又修りの一事を放
諸國を越りさるる口は又修り

凡流者

一蕉翁も東海道の一筋をもえざらん風雅の情
 ふうとわらんといふ戒先金結つうさ種バを新柳を
 ぬえのらよび居る志をうをけふ勿傷うて
 延喜の菅屋の巻紙に短衣をぬくう新柳とて
 て破づといふ梢壺の底らゝのぞれお綱うん柳う
 りとふらゝい移りうて志ざらんの采を樂しむる時
 風流乃ちありなるを今時のらんりなる流借師を
 ぶゆての風情を志とふあうでたくと秋田酒
 田の桑賣系をあらふ乃ち吳服賣の世界を胸はたく

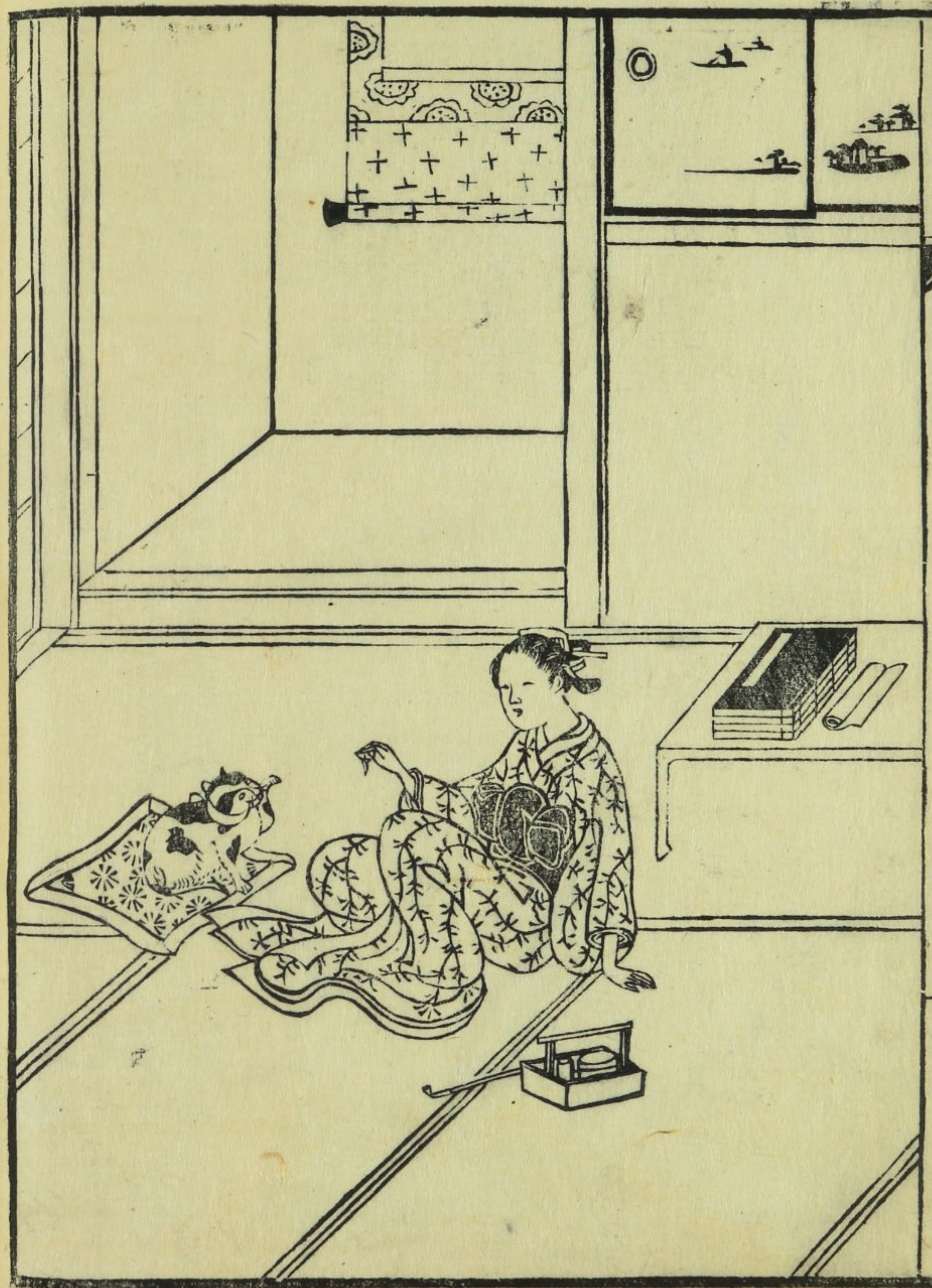
み込より頼つきして大格子の廣袖長脇指よとれ
 一定紋付の胸あてきうう伏つて津浦とさる
 せう一生名利よけうもて金銀を合算りゆとたか
 らいしく只ゆるる代實をおもんがたはう圓く
 をせう蝦夷切の頭陀袋並細きと紙墨會らつけ
 とのえらごたおましてあまうとてこの旦那をわら
 今年の菊且連申のらとよ仍程増うたりとて口ふ
 もつらんもろけとて撰集をもめ板料を合算り
 是れ虚より居る實よけうと風雅の結をこのと

水苔子院



新古今和歌集

卷之七



ぬる人ふ内ら如夜ぬとそら寝ても寝る水の車
 もろけむと只丸人の寝り爪の何の頭へ素門
 身へ商人足ふの行脚とそら寝るもあはれに
 人ものあはれ是や休借ふ身一の傳受との若
 せんも又しむるごとや

眠る蝶よりく仔をとるごとや 其角

嵐雪う素猫と愛とる説

嵐雪が素う福ふくから能を愛してうら
 らうとぶらんをとるを喰ひのも常をぬ器入

て朝夕いさめをばあさげうらに門人ともぞち
 らうもうらうとくあふ人もあはれと嵐雪折く
 獸を愛とるも福あふく事なう人ともあはれ
 うら愛物器喰おとるも忌むま目も猫うら
 らふ骨を喰とるやうとぬるまはぶるま
 られとも素志のびても是成あはれ先げうら
 さうあはれ日暮なりとくけりたふ留まの内そら
 らぶらやうらの猫をばあさげて仔のまんのうら
 寝させて骨あはれとぬく喰せとぬく寝らうら

るやうに頼むと出て出りぬぬ雪みの縁ををさぐく
一まらともまら〜妻をたもろつて猫をうよ事を
やめんと思ひつて約〜せらるる所有る縁ををさ
及を及ぶて人〜してまら〜らつて五日をうへく
先猫を君ぬらよん〜と縁をわらく〜けつらとなら
縁をれをこれをその縁ををいりら〜や志を〜ら〜
るる縁を切斗にさんぎもぬきくびも志をら縁
まららぬあまら〜かんと思ひ縁をを〜して
さるるなどあて〜縁も念のものをら〜思ひ〜く

とたのぬら〜ら〜て門口せごは二階をどけつ〜
つららがまら〜外〜出つら〜や〜縁ををぬき
今よ〜ら〜ら〜書に〜び〜り〜た方と
も君のひら縁もゆ〜ら〜二日四日さ〜れ〜書縁
と志の〜ら〜

猫の書つらまら〜君のう〜り 妻

く〜て〜ら〜あ〜く〜ぬら〜けつら〜縁を〜つまのな
とさる隣家の内室は是も猫をよ〜ら〜ら〜が嵐雪が
まら〜て化〜ら〜ら〜ら〜を〜出〜ら〜ら〜妻

つがふもつて居付る事必んと痛痛と事
 なる程家が知くやと解く何所何うと事
 つまじく色こころうたれを書うもの宿むさや家
 ぶつと猫を愛とらてをこころうたれとらぬ
 へまれとはうてのりさあうとさほくねとて合
 りる嵐雪もあつりしをうう人の足那きく雲ふ女を
 ろううてをうたれと事とて解く他う異つる
 愛く振うもつと事とて解く家云如く
 みるこころあつてほくとさあぐあつてさうと事

かた人さぞううてまよと徒とせて嵐雪うん
 そやうげ猫もあつて何ゆれく成るよ

わらさうとて免りやをこころうと事
 人くくくくくく

うつとぶをえんや初言れ玉う本 嵐雪

惟然城布を得る説

惟然坊の音よまうと能狂者まう西國行脚の時
 ちん播易非路のうよまうくあつてまあつて
 りくう狂僧の習ひを結び府をけるは

草物いんものをよふまゝくつあふて是これはあり種々布一丈五
 寸ふたのあふり惟無坊是を坊で種々くつあふてそ
 ゆに種々布一丈五寸ふたのあふり種々くつあふてそ
 て種々れ紗りの内うちへよふんと云々右あり種々
 五つを種々布一丈五寸ふたのあふり種々くつあふて
 新衣あらたなを着る出づるが一二所もけぬと云ふまゝ
 まゝくつあふり種々くつあふり種々くつあふり種々
 あり種々布一丈五寸ふたのあふり種々くつあふてそ
 着るきるくつあふり種々くつあふり種々くつあふり種々

りの垢あせけつるものよきものをくつあふり種々
 ぬくぬくくつあふり種々くつあふり種々くつあふり種々
 け種々布一丈五寸ふたのあふり種々くつあふてそ

清水しみずく米こめをくつあふり種々くつあふり種々
 杜若つばき 惟然

目録
 一 惟然城婚家より一宿の競
 二 惟然城俳諧の意を語競
 三 秋の坊早稲米を求む競
 四 秋乃坊万子小炭を乞ふ競
 五 許六令終の時相交の競
 六 蕉翁金城集會の競
 七 秋の坊早稲米を求む競
 八 秋乃坊万子小炭を乞ふ競
 九 許六令終の時相交の競
 十 蕉翁金城集會の競

俳諧世説卷之三

目録

惟然城婚家より一宿の競

惟然城俳諧の意を語競

秋の坊早稲米を求む競

秋乃坊万子小炭を乞ふ競

許六令終の時相交の競

蕉翁金城集會の競

秋の坊早稲米を求む競

俳諧世説

目録

九兆獄中歳旦の競

牧立置素堂の句物語の競

北枝如柳小酒を乞競

北枝家誂諧の夜盗人の競

北枝家焼矢の競

北枝雨中吟行の競

誂諧世説卷之三

惟然坊婚家小宿の競

惟然坊美法のの酒を經廻る時ある誂士のともよ
 やどる其あつてをたは妻をむくつてつと産家のうご
 くとおとえど振袖の小袖あまの衣拵よりけりおと
 なる朝とくおとる下女産後(けりて)る小宿僧とく
 知りたりとてやういふあまのちりり候とあるよ
 衣拵よりける娘の小袖一つ失つてさへけ坊のぬき
 たるものふとと走り入るあまのけり告るよあ

言言七言 三
の曰惟然坊の中く遊遊さざりき小器の俵ふあはれ
まろし酒落の道人されの朝の空を儀ぐんた免ふけ
小袖とまろく往まふたまのまあはれは終る夜あつ物
かろに明日へそくくの風土のくえん坊うんさざりき
ぬも先彼うと坊らうてんんやがて坊が終べき
まろくのくえ俵りて君らうしうは家よ惟然坊を
赤う有てまろくか其まろく今知とく立出る
ふ舟風のまろくして甚まろく志在ふ立ぬりて衣
柳ふ有し小袖をいふらうとまろく宿ひ来るらうえ

より小袖おろすのまろくは終る男女の服乃ワラし
まろく定て足るやあしんと彼振袖志る伊達
振振の小袖を立出く其俵らうて坊らうとま
減く人象もに志まろく風俗の雅者らうて

惟然坊詠諧の意を語説

惟然坊播及始終らう候候しておせし久く詠諧
の序へおせしおせし居坊らうをあり人へは程々
何とて詠諧の交り志終る今宵惟ら亭にて詠
諧ありておせしおせし終る坊打らうて

言言七言

云々たるをよくうふ家ハ誦誦序ありて終ハ日
て起きて日入く休ハ喫茶陰飯行位座臥も
皆能皆ありそれを外ハ能皆せよハ何れぞや
指の事ハ能皆と常と書りたる人よこそすむき
業されしつと終たれを其人且死らうん歎ト
くろりりりり

秋の坊幻住菴ノ宿と云説

秋の坊と金城ノ名もた風流徳化の大徳者也
祖翁湖南の現住菴よむや一時家宿を蚊の小

さらを死まきまうとのほいて一夜二夜う寝る
ふ森隈遁者の身の人のも無常迅速の戒を
いゝ鮎小物語あり禁中て又送りあひく
あがて死ねきたれこそぞ蟬の委 芭蕉
と一弓の教誨ありしもけ時のこゝんさそ

蕉翁金城集會の説

金城ノ水枝と秋の坊とよとけしよふ膝中
あまうに獨銛鎌首のあゝそい鑑とあひらう中
うたやうにも久けりし祖翁細通け柳のとそ

非言十六元

三

秋の坊乃今終ち正月四日あり〜とその其日友とを
一李東とらふ者坊の唐工傍にあり候了ん安さ
の侯匍匐して諸りまよ内了坊同家曆はら終り
軍をな〜とありて

正月四日よ終りけ世を去り〜 秋坊

と口とちむ〜と〜〜〜〜〜
李東驚あつら中あもけ坊の傍の〜自己を忘る
〜〜〜〜〜感涙別涙を留せる〜
〜〜〜〜〜秋の坊 李東

と名ぬぬ一白を〜〜〜〜〜

正月四日よ終りけ世の白字荒もあり
〜〜〜〜〜

秋の坊早稲米を求る説

秋の坊あり年乃秋を〜〜〜〜
日早稲米粥して〜〜〜〜
約束あり其日よありて小枝從吾小春白空を〜
らひ坊の唐工傍にあり候了ん安さ
日〜〜〜〜〜又坊のきほきてぬり
〜〜〜〜〜

「秋曰其子なり」家李東とよりのみ早稲米
そのぬきき約束せしむ彼ら中居あるむお遠ら
あしと思ひ各其期を約束しし李東より是を種
らばされど其物を交むる君子の物なる故これ
とくうりむく所中をあるとさきこきり早稲米を
お免しりたつむど商家の子よ入らばや種は是を地
どぬきがまうしとよれたるよあるもの云そ李
東より越ざらんらんまごさあさうらぬみちやう種は
ぶらと同りの時秋曰あるさう越さる程の物をいそ

「秋乃城万子」ふ炭を云説
いそさうを求むばいそいそてそ目を客もあつても
いそをさうしてまふりつ種り説とて

秋の城京原「種」ゆりたる比冬もや雪降つて
指氷もろふよ三衣一鉢乃介空をきあのぐなまこよだて
まゝとんて万子のりく炭をととて

「秋乃城万子」ふ炭を云説
とやまらしむ炭を万子けむの炭の字炭漢一説あると
炭一別炭をさうし種りささぬ人の執人道は種

の程終とやんぬりやん又秋の城乃能信ふ

能きもよふ原のほいで酒向を酒やけるたふら

るこれ酒流かそ能信ふの父母さぐ一秋の城う

云風流人さまことん貧窮さぐ一死後う茶錢か

たふえろ目も若しとよ能たり其詞うさうだ坊の

死後う一銀一錢の行をのさうとまう

さうと死風流の人さう

許六金終の時能信ふ之説

許六と責振の産せ武門を承とん蕉翁曰画

取て師とん能信ふかして弟子とんとの能ひ

能ひ丹青の妙をばう一生家かを自負して死を

萬物とん家傑の修行者さうたうの能の後中

へ足駄をたて入るものか家さうとさうあつ今終

らんととる時のかう

今と下とむが死ぬぞとせいはよも死能信ふ

さく老後と膚をさうか外自負のあつ自

撰の風俗文選篇突韻塞字陀法師等の書よえ

えう今と世も自負とるものか多も能信ふ

一象傳より出づる人をそとて家をとたしむること
 を字とてとらたは終るの道よきとありて年毎の
 子まごいふ力をそとて自負の口ありて却て諸人乃
 笑ひよものと成らたごいふをさうしてゆるし許さの
 自負のたふありてむりて風流より出て終る風流を志
 まは故より好むれく終るもさく宛轉する環の郊
 誠よりあやぐらき自負ありて

九兆獄中歳旦の説

九兆ありて金城の産して俗に位一醫業とて

てせしむるに嘗て罪者人ありて其連累獄
 中に入りて獄中に年を以てり其明るに牢中に入り

猪の首のほよきよ花のま 九兆

陽の光り身もゆるしぬきみみ

かくてあふあやほつみまのりてと天よ海に
 累獄の中をわくくしてびねひの眉をむきまのり
 死のけせ成りて海にのりてけりてや果を
 亡名してけりてと終るとさうと終るとぞ

牧童素堂の白物語之説

牧童の北枝を見よとて才能をあらわするは是れは自ら
 絶のあり終るといふものなり其の一人乃く是れも人
 くよ忠とて其昔と新波と新梅翁の海流をそ
 たる後蕉翁の門下に入て翁も牧童の如く其のありと
 参詣し一かのことより生涯眠るをそく其の心なる
 よも亦む一芭蕉の翁に海へて其の素堂の
 海葉事よよは蓮風情とて心とて心とて心とて心と
 及ぶ翁の口けりて蓮と音と音と音と音と音と音と

素一結つ其外を何れも翁に似たりとて言ふも
 是ての心んこは翁の心も底より心なるやうに
 して心一結つ今日の人情あるを牧童がてなかく
 してありよと云はれし心とて心とて心とて心とて心と
 心習つて心と傳ふかこの心は心けは心けの心
 心とて心とて心とて心とて心と

捺りし月とて出せありしち 牧童

とて心とて心とて心とて心と

北枝如柳ふ酒を乞説



金城乃北枝の古き蕉翁の門人ありしうそのも
如柳と柳をささぐり如柳の酒を賞をうたつて
とほ小枝のうらう嗜むなり日毎に彼を訊ら
酒を香流籍が遠く旬旬の風流を流しきり
彼酒家初の程らそめ終日おぼゆるるる後
かかーうんごらきりいそめいふらやもそ
風情をうらうありあつ小枝来つて酒を香ん
れうあつどのんぬる移くといふるまよるがも
志がくくして小枝を家の下女うぬる味やつと

言々下女又酒のゆきんと合点してあつと
るる小枝の口をくく一盃のむぐとつらり
の如柳も後をかして大差い一樽をゆ
くれとせ

夏酒や家とのりり火乃車 北枝

北枝家誹諧夜遊人の説

小枝の家して従者ありし時夜更く遊人入り
けをきり小枝う告ぐ小枝お笑ひくづ
様いそり出だきそのありとされいして

之屋居りて小皆掃きたりて其席を居りたけ小
せりしれし一茶釜らんく
とよお白出たり小枝をわくむ

ぬと人の目よりけらる目出さばよ 小枝

と身より此白さおまさと留米と思ふ屋いとま
とら人もあれど是らうらう障りありて目よりけ
らぬくの白小枝しりしりしとま

小枝家焼失の説

之様年中金城一池奥の憂ありて屏屋を

小枝野とまら小枝の家は炬燵小枝のいとを友どら
しりてとまらむりぬとま

焼よりけらるる花を散らまら 小枝

かくはとまらみつ 恬然自若たり是人世のいとま
あたら川の常ある事とらうく歩たり風土なれと
と人皆甚厚徳とらんしりぬとま其後又北枝火籠
小枝よりけらる 従吾人よりけらるけりてむり此を
情よりけらる 従吾人よりけらる

のりもに祝も兼もすむとぬの申に一句作塵生

従吾

五

小枝

のりたふ祝も年もすむとあつてさうさうの家がくのは
うゝ中にも清松を志まぶが常く風の流も
てあつてさうさう

け時の白う家足音とらふ集り略してたふ記と

焼よりうたれも花らうとあつて

北枝雅児がむくの家情さう

やあふりりしきとも梅さうぬうと 東花坊

梅うもや先一あうやけ見舞一 牧童

学も並るあう積小屋のや糸北枝

善法うかうと

さめ樞のね後うきに水鷲うと

曇うすれや卯の花乃時 従吾

坂越人けの筆さく杖突く 支考

音仙あり

北枝雨中吟行の記

あね年暮の雨降うやがて晴うふ小枝松
あつてあうと物ぬる道うけり合うものつ

一しし詰むといはるに發白もいふありくありと
覺けられたる家もいふいふとけむ

發白まかふ人ねえり梅乃念 北枝

詠世言卷之四

目錄

- 北枝蕉翁小菴と福英風雅堂の説
- 二川小と残家と出る説
- 東苑坊禅室と捨詠道入説
- 交考長崎廻りの説
- 交考巴静素名同船の説
- 涼菴花を尋肥前小至説
- 涼菴辭世の説

浪化蕉翁小御の儀と後説

尼智月蕉翁小御見と乞説

北枝舎羅と吊説

舎羅教盗と遊説

李東句を吟一歌と去説

句空蕉翁を尊む説

或人麦林小句の姿を問説

麦林抱望小遊説

誹諧世説卷之四

北枝蕉翁小義と後天風舞堂の説

芭蕉翁小御行御の時小枝の素内々野田のら本
 とつと西をあらむびありに給ふ小枝名はり草と人
 いふらのおなりと翁小御のしりてに翁とてと探
 し給ひてこれぞとてりしやう給ふ其河小枝の白
 翁とて故屋はり草とさしひりり小枝
 予らの良具翁も又一格とささきりり又其らら
 翁と菅葉と給ひて

あゝもほのまゝの兼の行末は小枝
け兼惟然坊附屬一掃加非諸子ふ傳くそ力
子寒瓜増位ふとそふ風羅堂とつをそそそ
けよのを納む

二川を殘家と出説

二川を越中富山の産してそその右守の言家
ふ仕へしそそのそりしが者ふは湖ふを伝へん
そ彩ひて居てありありの主人へけりそ若く候し
そ人もけりそよくやふしれか其の場をそり

其足と羈とそそそそいありと笑く係り髪
髪とそりそ所ら青入道とありそそそそそそそ

采られし人ふ花を二川

かく我家の隣子ふ姉一とくけりふ主人を
りそよりけそのを情をそそ終へそ所ら怒れそ
そ呼吸して懃懃とそ一川ら富山のうらふ
采のらうそそそびて一生をそそそそそそそ

東花坊禅堂を捨訓通入説

東花坊交考ら其法の産して初免へ禅堂ふ

今く法義司とてりみ年としの以

吹毛劔也春二月

腸断牡丹花下風

とてり偈げを傳つて宗門しゅうもんの人ひとくも末すえ粧けりく
思おもわれく才さい傍たがり東都とうとくてもわる寺てらの大おほ會あひふ瓊せう
巖いわの篠せう至いたハナ糸いとの回まわを揚あげ難たが凍ことそれり
法ほう眷くわん其その才さいをみ出いせのさうりときりしあり
祿ろく扱かくをくらねくもそふ偈げよりるなきんも
成なりりりまよりして神しん学がくと好このむ伊勢いせなるま

ともと光あきく山田やまだのあつり身みをよむぬらふ控おさて
りくそく風流ふうりゅう家けもあつりみ交まり其内そのうち涼りやう菫すみ
さざんあやうくく其英えい氣きふ感かんト其才そのさいを情じやう
と涼りやう菫すみを初はつ免めん許もとを偈げをよめて後のちり菫すみ
翁おきなの門かど人ひととあやうぬ果はつして其才そのさいをさうりくは初はつふ
葛くわの松原しょうげんを述の後のちり續つづ五論ごろんを撰せんり竹たけ御ごを東とう
花はなのあ集あひ小名せうなさく実まこと上じやう諸國しよこくの荊きん棘せきを切き
りて天下てんかふ正ただ風の道みちを解とり今いまよりあつても菫すみ
翁おきなのま道のみちの廻まわりくたふらふもさふ支し考こうの大おほ

功とつらぐ一彼の伊勢とて神宮に於ては
と偽形をえむ偽徒を守りて居りたりしが後
蓮二坊とありてハ肉舎をその放徒も有りたりしが
法師足戒をくく一聖殿を其末世に
牛にさぶくといひたりふ支考五のむ

牛にさぶく合点トヤ新瘦夕涼 支考

支考長崎道名の説

支考西花坊と号一西國行脚の時長崎は
杖をさむいとふ如七とて子統士有りたり長

海を蠻舶往來の港とて官人の門たつた
賞の徒も善美を好む坊のつら中華の海を
教ふ如七つ社中へ通傳の官人もあり
るく唐音美語をとるやうになつて風
流の移るものも多うありあり河津岸
海とす時西花坊をばる人ふ向ひそ
チヤウチンと流るる一終りれ皆く
ひまりて其後ハ善音を唱る者其の
て甚る次第ふ止めとて誠ハ面白
あつといふ

交考巴静素名同船の説

交考甚二房と交名して後尾張の巴静とら
 つま伊勢の國一すうとて素名の後亦素名
 似ら甚もきとらなるをふらつとて巖白う
 弓のうらみすみき鼓草にあたり雲雀の草
 ろう小字くをもきやうに洋くたる海面の青
 了たる景又とて奥の日向なり巴静の坊が
 宵残をくたぐえやうけ風流をえ處へはとら
 二句あらしうとて向ふ坊やふ機姫をる歌
 流きとて昔子

かろく風雅ふ志あるものと和母く思ふ
 の詞を定て其風流をえ處へはとら
 ぶ於其くしたるをるぬふ坊の回古人も
 ての唾にとらるる風流十ふあるとて
 出りのふあはだもけ素名發白とて思
 以真をく胸中にをみく之を今宵何
 ともあ終余る和をくたとてその巨
 して板白成事はとらとて其を
 けするもの胸中に素名乃はとら

作考

旅路世説

舟中

六



旅路世説

舟中

七



涼菫花を尋ね家小至説

涼菫花を伊勢ふ名おく 佐土く其白くハ涼菫白
 集ありありのまらつらう紅花らんくやかり
 そふふ厚もきて出で二三日ぬらう一丸ふか内
 くとあやみ思ひそまの花のりく人へて君の
 ふあまのふ厚うけ花をらんく京都を東山のけ
 くと思ひ出たふまの思ひらんくやかり
 らんと云ふおの思ひらんく京都の定宿(使)らんく
 あまのふもふらんくさたふ家(来)らんく後(後)磨(磨)寺

の極悪くはる物語ありらんく後(後)磨(磨)寺(や)らんく
 らんと云ふおの思ひらんく京都の定宿(使)らんく
 くと思ひ出たふまの思ひらんくやかり
 らんと云ふおの思ひらんく京都の定宿(使)らんく
 くと思ひ出たふまの思ひらんくやかり

涼菫解世の説

涼菫花馬の宿中に志したに誰れ枕頭ふはき
 そい居たり今や吹終らんく時門人待世ありや
 とるのく詞の下ふらんく目をおもひ

合意トヤ其曉(あ)りらんく涼菫

と笑ゆると思ふを云ふに息継ぐらうけりや世の人
の多くあつたるゆゑに終つてもけり成曉の甚とせし
らなご麦林史了相決ありしと終るもなきは従有
てみえらうぐらうと終る其甲にたそのを志すことと
より其病を痛症して病中の咏も

除菴

今とて人々死ぬると思ひし我身の上かくの仕合
らうの風流も笑へ侍る

浪化蕉翁小原身の儀を結説

浪化の越中舟波了老ありし浪去ま字の大きふ

住し終る風雅了志ありし一生のゆとありて白麻
集とよありしとを蕉翁の風雅と志すこと多あり
終るらう小原史了と終るをいふ原身の孟伯を
ら世は事と其角ら磯波山集も記してゆらう
の目やうと笑へぬと予も一ういふと終るらうとや
くささうらう

分入るるる桑野は夜や雄と川 浪化
尼智月蕉翁小原見を乞説

智月へ江島大津の乙州が母をそ母子成る風雅了

枕しく蕉翁を解とてある時翁は對面の席にて紙
 硯を翁のあし備へ紙子の袖にありて家へ飛くと
 きぶきその書て妙く読くとやほむきり終て翁うな
 づきあぐらふいそらふらう人へ飛えとてとてか
 ろう家先う志社とつるやと戯れ興へ終ふ
 とそ翁の死もたうと甚後近き程をうんう
 それてらて命やうう終つる花 智月
 さうううなるありうたなり

北枝舎羅と吊詠

舎羅ら流毒よ居く美と風雅う名を好つるもの
 まり翁もさうさうとて茶をうけ茶が好むをさう
 秀とゆやだ菰を教く卦うは美ふ儂石の儂を
 く物々うくうみさう一妾一女と供ふ陋巷と樂
 しむ金城の小枝甚風流を傳くはうんうう
 花よ枝ぶす時をばくけ唐をとてさういさうふ
 舎羅も家ふわりて日の暮るうを語つたけぬとかく
 して後もや空くくまらうとあうとほうけの神もえ
 えぬふ小枝うとくうのく何ぞ後さうくさう物う

あつて君子に全書よく回覧すの負か何ぞ
 も設くなき物ありしそ終る紙幣に承りて
 焼くまゝせんといふ小枝屋にてまゝ是を採りて
 やく来一合げりもあらん舎野之其来より四人の
 口を少くしてあつた後少くも程と好まらざり
 と云ふ小枝もあつたまゝ其風流のまゝと増
 たるの残感一入時としてまゝぬとぞ

舎野叔造の遺説

元禄十三年に句空草菴集とて訓書と撰じ

其遺書の頃全書の文をよ

よくまゝありしに吟してぬるといふ者針
 所よあつた入るうとてあつたものもまゝ
 いまもまゝ入る屋もあつた人もまゝ仕合の
 事記者も人らも大遺の中にも是つてと
 んうけたりやまゝぬとぞ
 ぬと人もほがまゝぬとぞ 月 舎野
 と吟して寝るに雅然け地は居るか写るると
 ぬとほがまゝも拙そ花よまゝと

惟然



李東白を吟み歌を去詠

李東ハ金城ト十村ハ國ト云ト一村落成つとも
 ちこれそのち常ハ風流を好ミ雅俗雜鞠ちもの
 言トよ拙ハ穢小古人の官ハ倍おちると云一が如く
 とんうこのふ風流あさうらおのづうう友人ハ志を結
 ふ其門ハ冠を挂く立ちまると云

山崩しても縁が記ちうり落り塔 李東
 と高きう吟咏大笑しておぬと穢く鐵人賢
 國の風人といふぞ

非高世元

白空蕉翁を尊む説

白空を金城卯辰山に任して庵を柳陰軒と
 し蕉門口深切の風土を蕉翁の門人とあり
 てうらやまのうらやまを念じてと稱せり
 小原の秋を忘れざるもの存人なり
 うらやまのうらやまを忘れざるもの存人なり
 向空が無好の画讃して

秋の夕ぬらみそ壺もさうりけり 芭蕉

とふ沙を寝ぬけむら無好のほほくまふらんえ

とふらせ成捨人ら海世の嘉慶をそらん捨く振
 情籠一つも持ち死みのとつるのふとつらて秋風
 吹きて草木零落の時ふまう矢比一点の塵埃
 ると抖擻の身のききんを述終つるものあり
 りとつらけ柳陰軒の翁も猿渡の杖をととて免
 終つて懐きくかつるの終つるの他ふ

せんくくとゆくかきき月めぬ白空
 藤咲く菴乃中りにさうりけり
 或人麦林の白の安を問説

ある時麦林の葦子桑田にて入来るる人あり彼
が云ふ義能治を尋びてに屋を雨種とも其法其式
どむらうに屋に是れ付る去るがうあうては乃
下敷もうらうむまぢやと聞きたる所の云其道志
さくあうぶうめいしんうた事と云ふ彼も又
云ふ幾白うやうのうを付る事やと同所の云只
目のあうむと云ふと云うと云く付る彼もの又い
と云うら意をゆうてらうぶ一白付てはさうせん
と云ふが女もいふ事と云うあうてはと云く付る折

うらうらもあうやうらうらん田一あうのさうて
あふ幾うたてはゆを指ししてあ種が別ら發
白のさうてさうて

百姓乃幾うてけけさむさ哉 麦林

と云ふくして終くとぞ又ある者能治の事代治
序ふ何と云流義いふ百韻う馬をうらんと定人亦
何くの云幾いらいやうやとあうてくはの付
しに麦林の吾ふ云飛かやうのる云うはり一た
やうのるさうてさうてさうてさうて云書を

我老く人後人として終るるまでけしむるに終るの
不用をいふもそ修行の由通を抄す清修者の
飛渡なるん

麦林松里小通説

麦林知命の年を起る松古市外どの松のありし
門人春波が書懐く云や老後の樂一ふ外ふ
何程もつづく一ある松を松里の奥を好む終るに化
の字はうごころぬるまう松かくらんあんと云
る麦林云家ら山門にうらむ松里師こ人の飛ら

老ぬまは白化も世のうらむ古の竹のりのみうまう
を折く松里小交うてそ奥をきく時々おのどく
老の厚情を忘るに終の中をうをを棄てらる
と覚く竹を其変化に後生にの古くある
る一松々飛渡の乃小其志をきよふものこと
身終るまで折く松里うらむに竹もも妓女
と松をきくもるも其其席を叶の奥を隠
て一生樂一と竹うらむに終る松里の交うる老の身
も終入やまう松久がうらむに今合の浮名をるが

人下はみせし被下ふくくもまうけ故ふくく
 む親にら青樓をえくくゆ塗炭のこく妓婦を以
 て禽獸とくくくその六其於ふりの愚くを
 郭妓女小派あらんや人々能人を活くく人を教
 くとく用るふくくく被く表林作の被くやく用はく
 人とくふくく愚目バ其くとくまども其行ひをく
 るくくを被くくくくくと初きて思ひあくく
 春波の物くくくとそのあくくくく女の被く
 水伝やくそのふくくく女女のくく被く 表林

俳諧世説卷之五

目録

- 路通蕉翁の勳氣と受花鬼母が説
- 杉風無季の句と吟どる説
- 越人旧懐の句と吟どる説
- 吉原花女奥州が説
- 梅貞の句蕉翁一見の説
- 北枝従吾が令終を説
- 風國集の題号と説

誦諸世説卷之五

路通蕉翁の勸氣を受て鬼母の説

路通らりてありあは者なりけりけりも時放蕩の好
 既く人の下ふらう外々をくくと祖翁の懐くも
 少くびききあはるゆをほけり後又翁の志よた
 かいも志ざくく師身の義を結ぬも翁の結焉
 らうれ程よ其罪をゆき行内くくハ昔のりくも
 ころりれくけりも路通ら芭蕉翁行状記よ其れ
 のそらうば翁らる宿所の世水の文をりも翁

宗門正統

跡を事平の大坂りと還俗してを終るるは推
 聖人志を以てあつたるに人なるは
 ふたふたともあつたるに人なるは
 うへに平生の人あつたるに人なるは
 何の不慮の事なれどもや捕らふべからず
 仕すべしと信じてありとも風雅の志を
 お成らんはむくの念より後よりうす
 二月十八日
 水換

二月十八日

水換

水換

うちの行ふもあつて其罪を救ふは
 うちの行ふもあつて其罪を救ふは
 昭示の人くとたふ後の進退の
 る事状記し詳しうあつたる書小湖
 の義仲守とて新の進退法今有り
 使を候ひてそ席を妨ぎし物とて
 へに妻徳とて古人を罪とて
 へんやあつたる語通鬼貫が
 是を懐く鬼貫よりやれくあつた
 是を懐く鬼貫よりやれくあつた

あり書あり大なる俗なり鬼貫なる蕉風よけに
 こころも其に伊丹の鬼貫と人の称しそそや
 賢志の隠者なり洗ふ貧乏せあり時一女を
 高家のおもひそのふと嫁とぬ人なりは鬼貫
 く義を守りて是成りさうはかくもぞ風流の人
 といぬ火の中へ臨む在室とてはあはれさふ
 んやもして路通もいら者へ何とて風流の人
 あはれ巧くを借らんかぬる志とて人の其志の
 聖那さしめりさうとて古書小田詩の志とて



徘徊ふぢぢくも又死ううんや

翁のけし柳をけみきこもてあじうら

目うらうや海きくと水乃秋 路通

教賀よそののらうきうら

あうらうのこま終をさうし 神 送 鬼貫

杉風無季のうと吟とる説

秋風々東武了聲して翁の東行をさうらうこの如
く志をほくうらう言身さうらうらう翁の

古池や嘘花とい水乃音 芭蕉

と名きもさ吟も別ら秋風ら別 聖保川六間塘と
うらうの唐ふてのらううて其古池於今ふのらうて
地とさうぬいとせ翁のけし柳を送うそ翁を保
く抱ふせうて送別のうらう

何とれく芝吹風もあをれさう 杉風

うらう無季のう吟うらうとぞ是も翁は成うらうか
うらうらうのらうらう其情のうと成をうらうとて季
のうははもあををけうとせ也けう成をうらうらうらう乃
序ふ素堂うけけう秋さうやささうや作者も

あつた口はあつたのうたさうんとお稱へて終つて
りこつた難のうら事ハ翁の生前ハ法ありさ
からなつたのうら事ハ翁の生前ハ法ありさ
どそ何れ古人をさうして其格をたうらうて終つ
は是をさうて去來杉凡涼菴なども難の香白世
るわうて是又蕉門の一格をさうて今の紙譜を賣
その方う難があ終つて終つても難わうらうてさ
が初うんはさうなるさうてのうらあつて終つてもあ
とまぬけるうら右もあつたさうて終つて生前あつて

ふ定免終つてと其免をほくみをはさうて終つて
の乃ふ免をさうて後退の辭をさうて終つて終つて
の從う祖翁近化の後松風と交考と終つて
交考さうて東武小御を入る御を切さうて終つて
風がうらたうたうたさうて終つて終つて終つて
刈苗集ふ松風さうて交考の文をさうて終つて終つて
あつたうらうたさうて終つて終つて終つて
あつたうらうたさうて終つて終つて終つて
あつたうらうたさうて終つて終つて終つて
あつたうらうたさうて終つて終つて終つて

を信じててまゝにいふ病若うとありけり

蚊のそこのもき者よるる夏の内 杉風

是れち蕉翁滅後のゆきうきうきとあそぶを
後をうきうきみづうに古人の足跡を踏んで我も
あやうらんを感ずらん古人の書と博く見
るの癖念とてさうさうしくも懐く風
雅の深人さうさうや

越人回懐の白と吟とる説

尾張の越人も蕉翁の下葉ふらん門人あり

ある年翁の行脚を依り侍るもさあやうけ
るゆかりに後ふらん初發の志もさあやう
き女もと出入り事も侍りし翁の其後にあ
るゆかりを懐くもや其後の行脚も越人
ありしはもと見侍るを終りしてつとふ
くゆかりもさうさうき侍りし越人ほほめ
うきうきし思ひもつ時猶も其越人
くみかこらうきとぞ翁もけ慚愧をよそ
侍る後の撰集し白もか入りしとて実や

服部世説
巻五



服部世説
巻五



色を君子の戒むるを子孫と又玉の危のそよ
まき風情もろ敷くけお端をたいてそのやど
うたをたぐるこそ織りし風流の人と云つてかたれ

吉原松女真州の説

真州を其師にぞおれ東都吉原の松女
うして蕉翁の世ふ風流の称をほ撰集すも後
のを加入志結くそあはけむりまどくううた
人す中云ふ了れ者あつて勢もそくぐま
とまもつ時真屈けりそとゆくあまはく

恋死るを糸塚く唱ふる郭公 真州
と入帳云へん記識す後子の休采のか賀るうと
ふだり其交ふ云

かひくうらやひのちよ休采のらう斗れん歎えん
か賀も賀うたる人のそくぐまうけりそと記ふ
てほろへくたれおあり

梅負の白蕉翁一思の説

梅負を休采と云ふの聲うてそつたれう俳諧を
このくすすのひそん

ふ守や只のさうく二三本梅負

蕉翁^{しやうおう}の四行^{しやうぎやう}脚^{けつ}の後^{のち}は白^{しろ}と赤^{せき}を足^{あし}せしむにふく

流^{なが}ふとそ其^{その}後^{のち}翁^{おう}の程^{ほど}はく近^{ちか}仙^{せん}ありし外^{ほか}

翁^{おう}の電^{でん}質^{しつ}を磨^こらるる白^{しろ}さしとふ後^{のち}ふ

片^{かた}ふらうて水^{みづ}とくせり杖^{つゑ}あり 全

とふ白^{しろ}さしと人^{ひと}くふ移^{うつ}るる程^{ほど}はくさしと

やうさくして芙蓉^{ふよう}翁^{おう}の旅^{りょ}は趣^{おもむ}き侍^{さむらい}舟^{ふね}の風^{かぜ}雅^{みやび}の

連^{つら}人を失^{うしな}ふく歎^{なげ}くむ此^{こゝ}の事^{こと}は化^{まじ}者^{もの}あるとや

北^{きた}枝^{えだ}徒^た吾^わが今^{いま}終^{はつ}を歎^{なげ}説^{せつ}

徒^た吾^わら小^こ枝^{えだ}が人^{ひと}りして一^{ひと}日^{にち}も相^あ通^{つう}せむ

さかくて徒^た吾^わ存^{ぞん}の床^{とこ}は神^{かみ}々^々なりし日^ひ毎^{まい}

交^{まじ}りたる友^{とも}さしごと小^こ枝^{えだ}共^{ども}もぬくさうさ

湯^ゆ粥^{じやく}の棧^{せき}塔^{たつ}さうかづり積^つむるとかくさるる病^{びやう}い

回^{まわ}くふ守^{まも}りりしや流^{なが}療^{りやう}の淋^{りん}病^{びやう}さうとさしと後^{のち}々

はくふ病^{びやう}かゝ僕^{わが}さしとさしとものち朋^{とも}友^{とも}の位^ゐ

を失^{うしな}さうとさしとにほつるさしとさしと

くして徒^た吾^わ命^{いのち}終^{はつ}ふはと小^こ枝^{えだ}あつてさしと

今^{いま}其^{その}披^ひをらむ徒^た吾^わく象^{ぞう}をすてと斗^{たう}つて其^{その}跡^{あと}

々大夢として埃^あくも^く経^{けい}きて^て海^うぬ^ぬ初^{はつ}を^をよ^よそ^そに^に
 くもけふとてえ^えて^て扱^あは^はけ^け復^ふた^たら^らう^う続^つく^くは^は言^ご
 其^{その}ふも^もふ^ふ味^{あじ}を^をと^とも^も故^ゆを^をも^もと^とこ^こへ^へて^て位^い女^{にょ}の^の
 交^まう^う深^{ふか}き^きも^もと^とあ^あぶ^ぶ一^一小^こ技^ぎが^が妙^{まう}状^{じやう}を^を行^なふ^ふ事^{こと}も^もた^た
 と^とせ^せ

風國集の題号と誤説

俗^{しやく}の^の風^{ふう}國^{こく}ら^ら蕉^{せう}門^{もん}一^一方^{かう}と^と々^々の^のむ^むら^らよ^よか^かの^のい^いわ^わら^ら
 一^一つ^つと^とも^もく^く自^じ己^ぎの^の言^ごぬ^ぬら^らう^う向^{かう}紙^し集^{しゆ}の^の志^しを^を記^き
 う^うら^らな^なる^る書^{しよ}と^とあ^あり^りて^て許^{きよ}ら^らが^が淺^{せん}き^きを^をう^うり^り風^{ふう}雅^やの^の

名^なを^をと^とり^りて^て己^{おの}が^が才^{さい}の^の度^た量^{りやう}と^と志^しを^をし^しる^る友^{とも}や
 あ^あら^ら初^{はつ}蜂^{ほう}菊^{きく}の^の香^{かう}二^に集^{しゆ}の^の題^{だい}号^{ごう}と^とあ^あや^やま^まら^らて^て世^よ乃^の
 人^{ひと}の^の下^{した}の^の流^{りゆう}士^しの^のや^やう^うに^に思^{おも}へ^へとも

二日月乃秋をそそふやまれ止 風國

と^とい^いふ^ふら^ら其^{その}時^{とき}乃^の人^{ひと}さ^さら^ら及^{およ}ぶ^ぶた^た一^一物^{ぶつ}を^を始^{はじめ}
 正^{ただ}と^とい^いふ^ふ一^一つ^つの^の流^{りゆう}士^しの^のつ^つら^らな^なら^ら流^{りゆう}塵^{じん}を^をう^うり^り其^{その}
 名^なを^をと^とり^りて^て撰^{せん}集^{しゆ}と^とい^いふ^ふを^を用^{もち}ひ^ひが^が流^{りゆう}乃^の
 あ^あや^やま^まら^らう^うて^て情^{じやう}を^をさ^さら^らふ^ふあ^あら^らう^うは^はや^や今^{いま}の^の世^よも^も
 初^{はつ}を^をよ^よそ^そに^にの^の物^{ぶつ}語^ごと^とあ^あら^らな^なり^りて^て解^{かい}ら^らし^した^たり

言部七言
其名を發したるが次乃古人の好状なり
書ふ多く妄述するも入るやふ多し乃
終を辨したるものもありぬえとく撰集の
二場のそ終業するは是を切破して学ふ
る紀を二三子乃十月のふを恐るべし

俳諧世説五之巻終

俳諧世説後編未刻
同蓬萊嶋 全三冊 出來

蕉翁文集

天明乙巳春

平安書林

間之町通御池上町

林 權兵衛

御幸町通姉小路上町

菱屋孫兵衛

同町

菊舎太兵衛

